令和８年４月 24 日

報 道 機 関　各位

富山の空き家を改修した住宅「山川藪文庫」が 2026 年日本建築学会作品選集新人賞 受賞！

富山大学芸術文化学部 籔谷研究室が設計した自邸改修プロジェクト 「山川藪文庫（sansensoubunko)」（富山県氷見市） が、「2026 年 日本建築学会作品選集新人賞」を受賞しました。

本プロジェクトは、富山の住宅文化（大きな家／家族形態の変化）と向き合いながら、既存住宅を「壊して建て替える」のではなく、“残しながら減らす”「半減築」という手法で現代の暮らしに合わせて再構築したものです。さらに、住宅の一部を地域に開く図書室として位置づけ、住まいを「私的空間」だけでなく、集落とゆるやかに関係する場として更新しました。

施工では解体・塗装・左官・壁や三和土（土間）施工などを、職人の指導を受けながら可能な限り自主施工で実施することで、施工ノウハウを蓄積。加えて、下水道のない地域条件に合わせ、コンポストトイレや傾斜土槽法（排水浄化システム）を導入するなど、暮らしと資源循環を結び直す実験的な住まいづくりにも取り組んでいます。これらの実験的試みが、今後この地域への移住希望者のレファレンスとなることで、この集落の風景を守り続けることにつなげていきたいと考えています。

なお、本プロジェクトは、北陸建築文化賞、富山県建築文化賞優秀賞も受賞しています。

■取材のポイント

「半減築」　　：壊しすぎず、残した要素が新しい価値へ転換されるプロセス
住宅を地域に開く：図書室を設け、集落とのコミュニケーションのきっかけを生む空間構成
自主施工×学び　：職人に学びながら仲間とつくる「施工知の蓄積」
資源循環の暮らし：コンポストトイレ、傾斜土槽法、断水時にも機能する暮らしのレジリエンス

■取材のご案内

現地（氷見市）での建物案内・取材対応が可能です。設計意図（半減築／地域に開く住宅／資源循環）や、受賞に至った背景、今後の展開（研究・教育への接続、地域への波及）について、写真・図面を用いながらご説明します。

■詳細（プロジェクトページ）

https://yabutani-lab.com/project/105/

【本件に関するお問い合わせ】
富山大学芸術文化学部　籔谷祐介
TEL：0766-25-9200　Email：yabutani@tad.u-toyama.ac.jp

山川藪文庫
Sansensoubunko

生態的集落景観と暮らしをつなげる実験

南東側夕景

©Kenta Hasegawa

庭より土間を見る。既存の和室 2 室を半屋外空間とすることで、地域の人々を迎え入れる中間領域として機能し、図書室へのアクセシビリティを高める。三和土土間は、近くの山から土を採取し、ワークショップ形式で専門家指導のもと自分たちで施工した。

©Kenta Hasegawa

半減築による豊かさを思考する

富山県氷見市の中山間地域における自邸の改修プロジェクトである。富山県の住宅は日本一規模が大きい。それは冠婚葬祭を自宅で行う風習や三世代同居によって支え合う生活様式が影響している。しかし、現代においては生活様式や家族の形態が変化し、それらと生活の器としての住宅との間にギャップが生じている。そこで、「残しながら減らす」半減築という手法を用いて、現代のライフスタイルに合うように規模を調整しながら、地域のひと・もの・できごとや、それらから生まれる風景と豊かな関係性を築けるよう建築を再構築することを目指した。

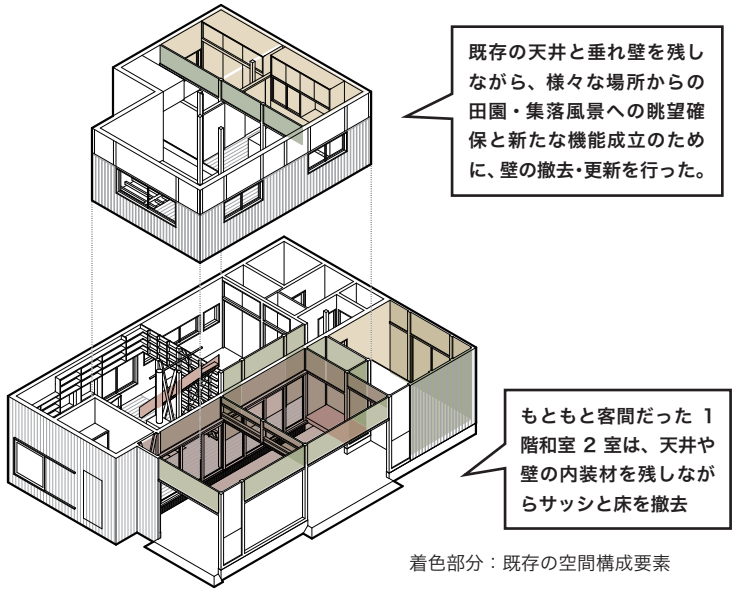
半減築とは、既存の空間構成要素を部分的に残しながら撤去することによって、新旧要素の多様な関係性を生かした新たな空間価値を創造する建築手法である。本計画では、解体する際に出てしまう産業廃棄物をできるだけ減らすために、構造補強や断熱工事など空間性能を確保するために撤去しなければいけない部分以外を残し、それらをコンテクストの一部と捉え、設計に取り組んだ。

もともと客間だった 1 階和室 2 室は、天井や壁の内装材を残しながらサッシと床を撤去することで、屋内の安心感と屋外の入りやすさを合わせ持つ空間が生まれた。ここでは、田園風景を眺めながら朝食を食べたり、仕事をしたり、農作業や DIY をしたり、地域の人を招いてマルシェやコンサートを開催したりしている。家族の暮らしが拡張されるとともに、地域との緩やかなつながりを生む中間領域として機能している。さらに、2 階部分では既存の天井と垂れ壁を残しながら、様々な場所からの田園・集落風景への眺望確保と新たな機能成立のために、壁の撤去・更新を行った。それにより、空間の上部と下部での領域にズレが生じ、多層的な拠り所を持つ居場所が生まれた。

半減築は、地球環境に配慮しながら、既存の建築構成要素をポジティブに価値変換し、暮らしの中に多様な関係性を構く改修手法である。

半減築により屋内の安心感と屋外の入りやすさを合わせ持つ空間が生まれた。

©Kenta Hasegawa



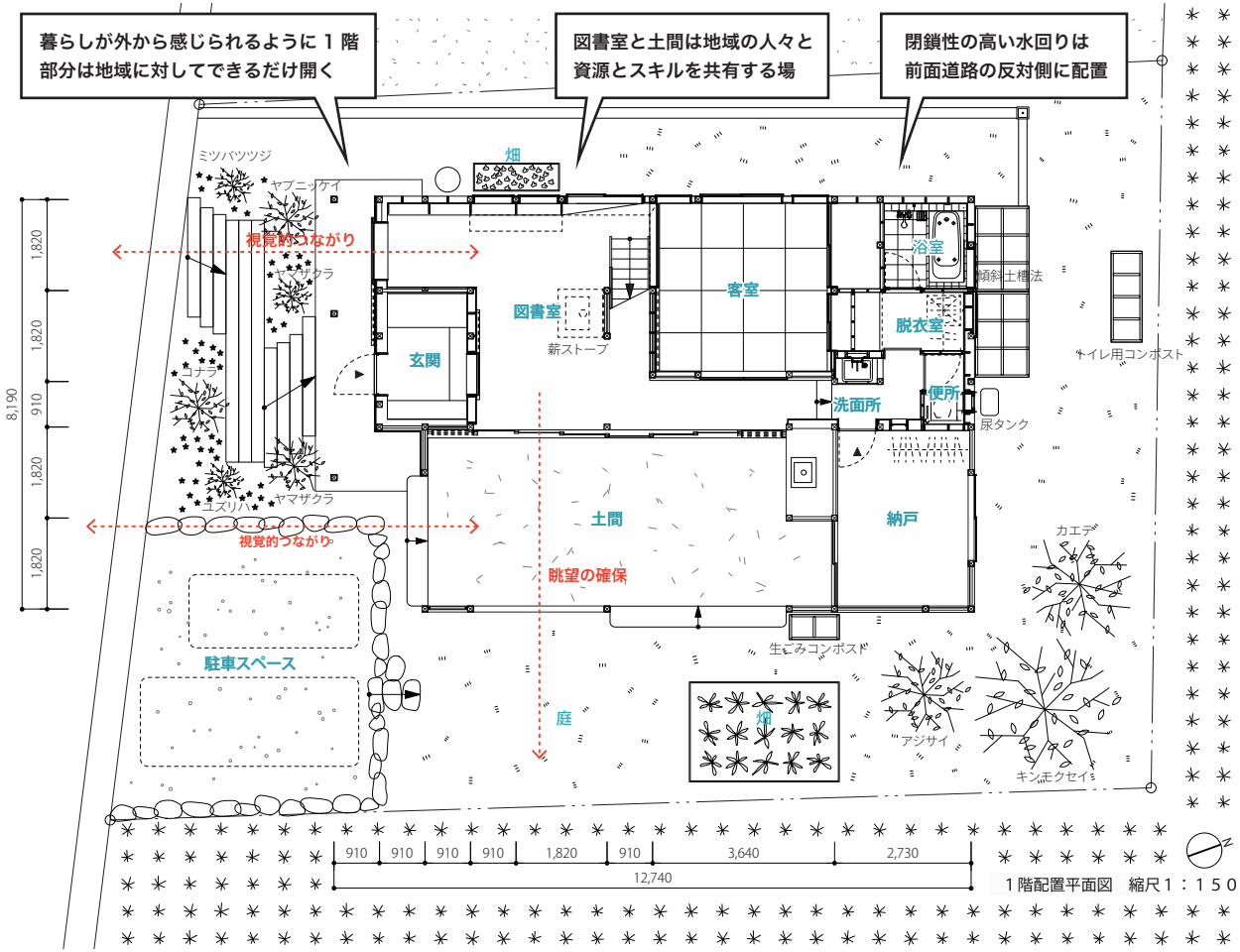
着色部分：既存の空間構成要素

半減築により空間の上部と下部での領域にズレが生じ、多層的な拠り所を持つ居場所が生まれた。

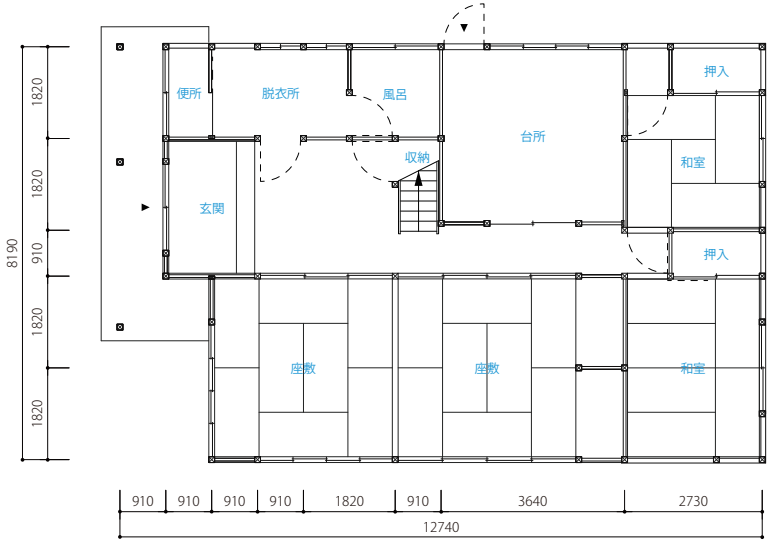
©Kenta Hasegawa

地域と資源やスキルを共有し、創発的な関係性を築く

養老律令の雑令に「山川藪沢の利は公私共にせよ」という条文がある。これは、生産活動や日常生活に必要な物資を確保する上で重要な山・川・藪・沢のような地の占有を許さず、皆が自由に用益することができるという意味である。移住者である私たち家族がこの地で豊かに暮らしていくためには、**私たちの持っている資源やスキルを地域と共有することで、地域の人々との創発的な関係性を築く**ことが必要であると考えた。そのために、もともと閉鎖的であった住宅の１階部分をできるだけ地域に対して開くことを目指した。前面道路のある南側に配置されていた水回りは閉鎖性を生む要因の一つであったため北側に移し、南側には妻が所有するたくさんの本を地域と共有するために図書室を設けた。そこには前面道路に向かって開口部を設けることで、仕事や趣味を楽しむ家族の様子が外からも感じられるようになり、地域とのコミュニケーションのきっかけが生まれることを意図した。さらに、図書室を、隣接する半屋外の土間空間に対して開放的にすることで、土間空間は地域の人々を迎え入れる縁側のような空間として機能し、図書室へのアクセシビリティを高める。このように１階を地域に対して開きやすくするために、寝室・キッチン・リビング・ダイニングといったプライバシーが必要な生活空間を２階に集約し、それらが分断しないよう、小さな吹き抜けを介してそれぞれの気配を感じられるように工夫した。私たち家族と地域の人々がそれぞれの持つ資源を共有することで新たな暮らしの価値が生まれる。私たちが目指す創発的なコミュニティとはそのような場だと考えている。



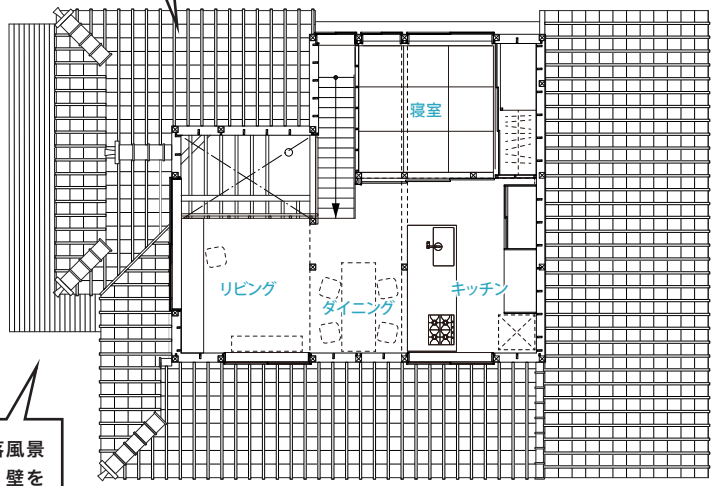
１階配置平面図　縮尺１：１５０



改修前１階平面図　縮尺１：１５０

光・熱・風・支援の通り道となるよう、図書室上部に吹き抜けを設けた。吹き抜けを介して、上下階で気配が感じられる

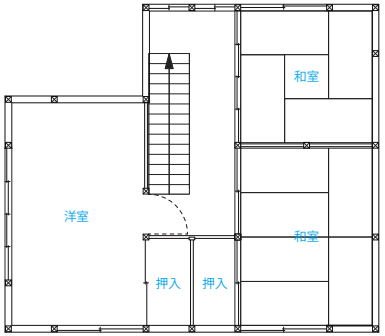
既存階段を再利用し、向きを変えて設置



様々な場所からの田園・集落風景への眺望を確保するために、壁を撤去し、寝室の引戸を開放するとワンルーム空間となるようにした

プライバシーの確保が必要な空間を２階に集約することで、１階を開きやすく計画

２階平面図　縮尺１：１５０



改修前２階平面図　縮尺１：１５０

リビングからダイニング・キッチンを見る。既存垂れ壁がゆるやかに領域と奥行きを生む。

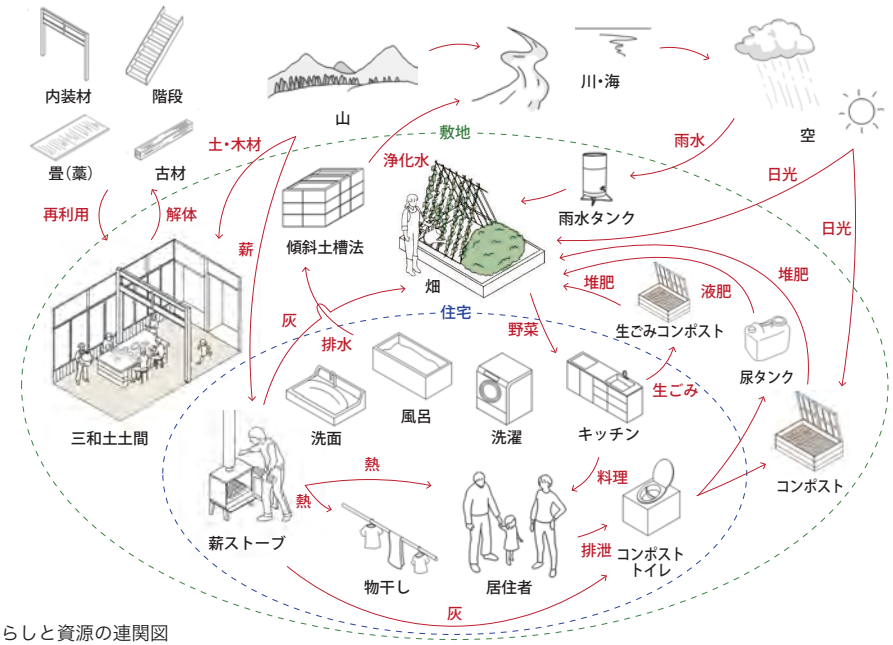
©Kenta Hasegawa

キッチンからダイニング・リビングを見る。既存の垂れ壁と柱がゆるやかに空間を分節する。

©Kenta Hasegawa

生態的集落景観と暮らしを繋げる実験

この地域は下水道が整備されていない。そのため、**トイレにはコンポストトイレ、生活排水の浄化には傾斜土槽法という排水浄化システムを採用**した。コンポストトイレでは、微生物の働きにより排泄物を堆肥に変えることができる。薪を燃やすことで生じる灰を使って、虫の発生を抑制する。また、尿は雨水で薄めて液肥にする。これらの肥料は畑に活用し、そこで育てた食物を食べることで、**小さな資源循環の仕組みを構築**する。
傾斜土槽法は、四電技術コンサルタントの生地正人氏が考案した、底面に傾斜をつけた薄層容器に土壌を充填し、汚水を浸透流下させて水質浄化を行うシステムである。低コストでエネルギー不要、維持管理も容易である点に特徴がある。この方法も容器の中の微生物の働き活用するのだが、熱湯や塩素系洗剤を流さないようにするなど、微生物の存在を意識しながら暮らしている。
これらは**地球に暮らし続けるための実験**であり、この住宅に暮らすことを通して地域や環境との関係を考え続けている。私たち家族はここの景観に惹かれて移住を決めた。この景観は地域の生態系が空間として立ち現れたもので、私たち家族も含めた集落の人々とインタラクティブな関係にある。**ここでの実験が、今後この地域への移住希望者のレファレンスとなることで、生態的集落景観の継続に寄与することを目指した。**



暮らしと資源の連関図

作成:富山大学籔谷祐介研究室 北島陽貴＋黒山真樹

傾斜土槽法による排水浄化システム

三和土土間に混ぜる藁を古畳から取り出す

式台に再利用する古材を選定する

コンポストトイレの堆肥でつくった畑

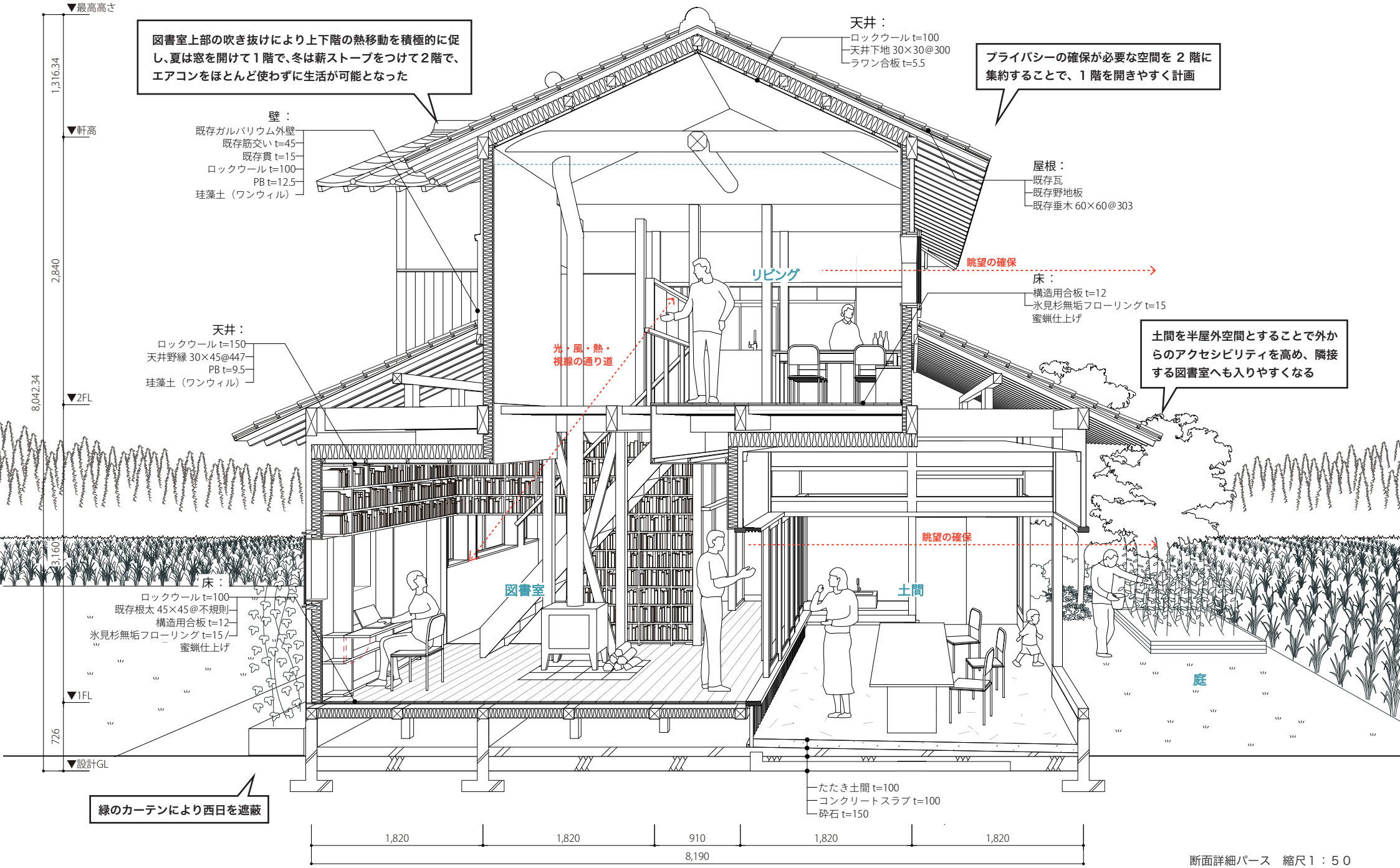
西日を遮蔽する緑のカーテン

コンポストトイレ

敷地周辺図　縮尺１：２０００

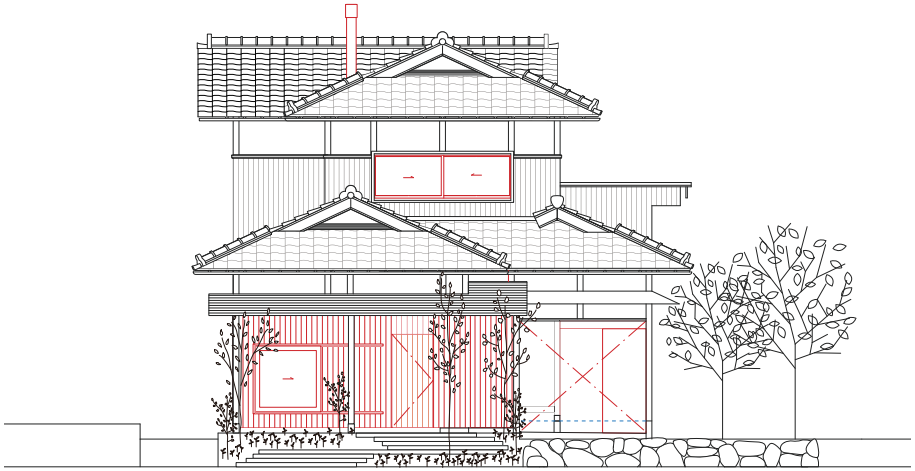
東側から見る

©Kenta Hasegawa

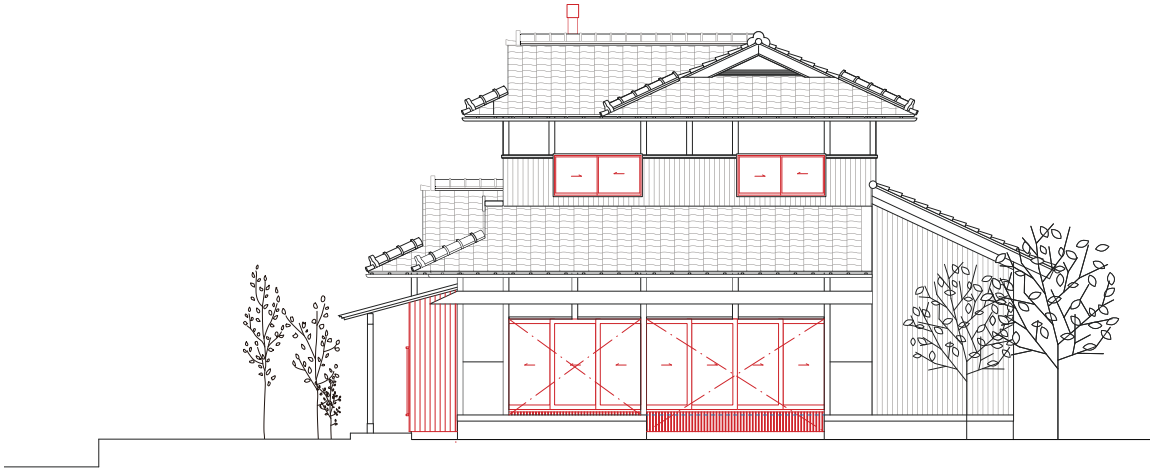


断面詳細パース　縮尺１：５０

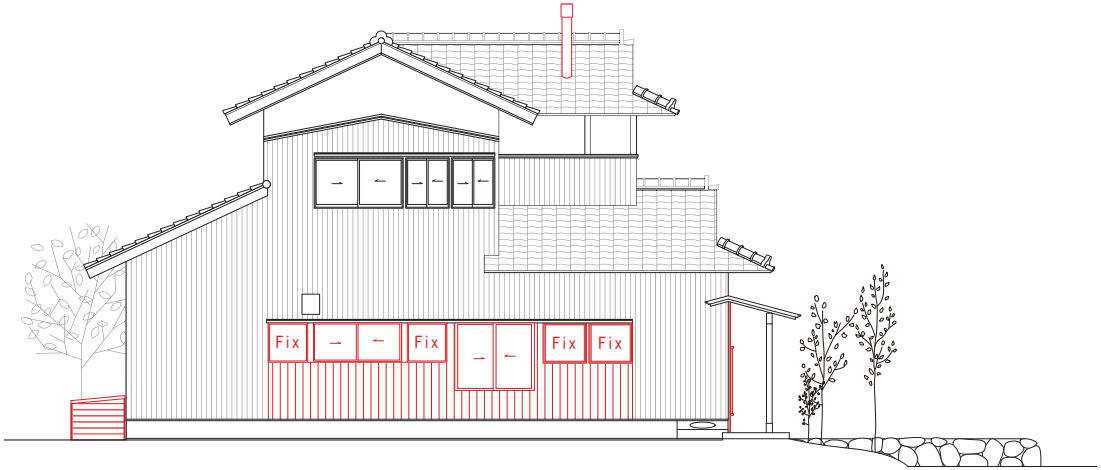
赤字：改修部分



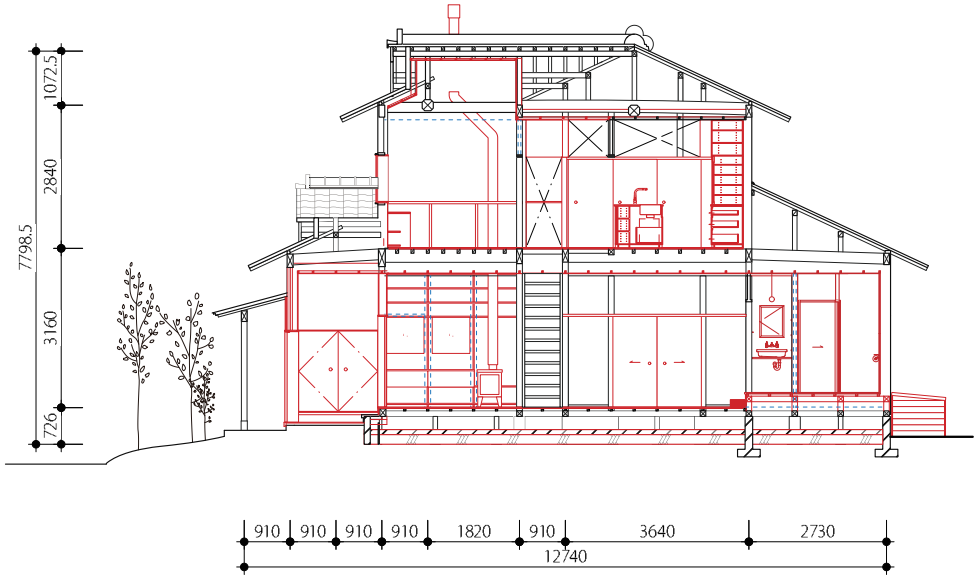
南側立面図　縮尺１：５０



東側立面図　縮尺１：５０



西側立面図　縮尺１：５０

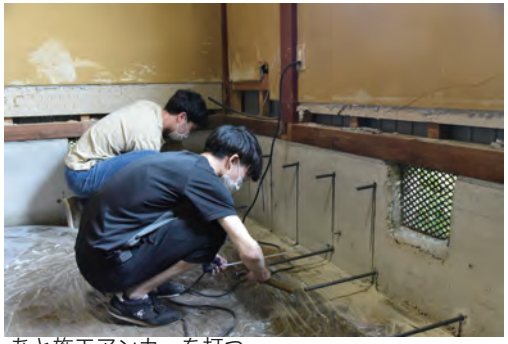


長手断面図　縮尺１：５０

部分自主施工による知識・技術の習得

「学び」を最大化することを追求し、解体、塗装、左官、壁や三和土土間等の施工は職人に指導を受けながら、できる限り学生や仲間とともに自主施工を行い、施工知識・技術の修得を目指した。そうした知識と技術の関係者への蓄積は、今後、移住者をサポートする際に役立つリソースになると考えている。

解体


あと施工アンカーを打つ

コンクリートを練る

型枠をつくり、基礎コンクリートをを増設

建材として使用する木材を伐採

石膏ボードを張る

建具の塗装

珪藻土の左官

畳から三和土土間に混ぜる藁を取り出す

地域の土を使って三和土土間を施工

庭づくりのために地域の植生をリサーチ

前庭づくり

図書室から土間を見る。引き戸は土間側に迫り出して設置し、大きく開放可能とした。
半屋外化した土間を介して田園、家並み、山が織りなす集落風景へと繋がる。

©Kenta Hasegawa

前面道路から建物を見る。開口を設け、図書室の様子が見えるようにした。

©Kenta Hasegawa

客間から図書室を見る。もとも南側には便所や浴室などの水回りがあり、前面道路に向かって閉鎖的であったが、それらを北側に配置し、窓を設けることで、地域にひらくことを意識した。窓は低い位置に設け、道路からの視認性を高めるとともに、内部から前庭への視線を確保した。

©Kenta Hasegawa

図書室。隣接する半屋外の土間と上部の吹き抜けにより、
水平・垂直方向への広がりを感じる。

©Kenta Hasegawa

階段から２階を見る。階段は既存のものの蹴込み板を撤去して透過性を高め、
向きを変えて再利用した。手すりも古材を再利用した。

©Kenta Hasegawa

２階ダイニングから階段方向を見る。寝室の引き戸を開放するとワンルームとして利用できる。

©Kenta Hasegawa

寝室からキッチンを見る。既存垂れ壁がゆるやかに空間を分節する。

©Kenta Hasegawa

マルシェの様子。近所の方、様々な世代の人が集まる。

ミニライブの様子。

研究発表会の様子。

朝食を食べていると、近所の方が入ってくる。

住宅お披露目会の様子。